

黒川高秀君追悼文 一

二十一回生 平田 坦

「平田君、今日から一緒に仲良く勉強をしたり遊んだりしましょう。」黒川君が私に呼びかけた最初の言葉です。

小学校5年生の6月、千里第二小学校に転校してきた私は担任と決まった東谷勝司先生に連れられて教室に入りました。教壇の上でピヨコンと頭を下げた私の処へクラス会長の黒川君がつかつかとやってきてこう挨拶をしてくれたのでした。おまけにその直後の休憩時間にはクラスの主だった生徒を集めて「平田君は遠い所から来たばかりで千里山の事も学校の事も判らないのだから、皆で親切にしてあげよう」と呼びかけてくれました。あとで判ったのですが、彼はクラス会長であると同時にガキ大将でもありましたから、彼のこの言葉には重みがありました。お蔭で私は転校生への陰湿ないじめを全く経験する事もなくその日からクラスに溶け込むことができたのでした。

処で私は生意気にも黒川君と「君」呼ばわりをしている事をお許しください。今改めて「黒川さん」とか「黒川氏」などと呼んでは天上の彼が苦笑いをする様に思えますので。

黒川君は誰もが認める秀才でした。それもクラスで一番とか学校で一番と云った低レベルのものではなく「世にも稀な」頭脳の持ち主だとその頃からすでに評判でした。しかし、私の追悼文はその事を称えるためのものでありません。彼の生涯持ち続けた信念の事を主に取り上げて故人を偲びたいと思っています。

彼が生涯掲げ続けた信念は「ヒューマニズム」であったと断言して間違いないと思っています。

冒頭の出会いの話はその信念の萌芽と云えましょう。

もう一度小学校の時の思い出に戻りますが、ある日、東谷先生が「尊敬する人は誰か？」と生徒に問われたのに対し、彼はただちに手を上げて「アブラハム リンカーン！」と叫ぶように答えました。そして、「奴隷

制度を無くした大統領だから」と付け加えたのでした。かなり最近の事ですが、彼が中国少数民族の留学生を食事に招いた席に同席した事がありました。少数民族の人たちが国で不利な立場に立たされ苦勞しているとの話を聞いてその不条理につき強く反応し憤慨をしていました。弱者に対する思いやりが人一倍強い彼の気持ちを垣間見る思いでした。

医師は患者のためにある、と云う事を繰り返し口にしていました。病気になる私の家族は云うに及ばず国内外の友人・知人を多数彼の処に送り込んで相談に乗ってもらいました。専門の整形外科関連の病気の場合は無論みずから診療に当たってくれましたが、その行き届いた配慮は半端ではありませんでしたし、自分の専門外の治療を要する時は最も信頼できる専門医に対し懇切丁寧な紹介をして送り出してくれました。お蔭で多くの人が健康を取り戻せたのですが、彼の長い医療暦の中ではどうしても治癒出来なかつた難しい例もあったそうで、そう云う折り、無念さを抑えきれず、家に戻ってから号泣していた事もあったと奥様から伺った事があります。一方、東大病院長の頃に「うちの

病院は果たして良い病院なのかと考え込むことがある患者をもっと大切にされる様改善したいのだけれど、障害も多くて……」と、苦痛に満ちた発言をした事がありました。ちょうどその頃病院内部の問題があつて本来の研究・治療活動に専念するのに苦勞していた様です。

昭和大学横浜市北部病院設立に当り初代病院長に就任した時、患者にやさしい病院と云う点で日本一の病院にするのだと、その意気込みは大変なものでした。就任以前にかなり進んでいた病院設計も彼の理念に合う様に何度もやり直しを指示したとの事でしたし、各科の医師を集めるに当っては出身大学に拘ることなく日本全国からメガネに叶う医師を集めることに奔走していました。希望通りの医師から承諾を取れた折り、門外漢の私にまで喜びを伝えてくれた事もあります。一方、院内では各部局間の風通しを良くしなければいけない、医師と他の医局員との間で身分的な上下関係があつてはならない、などと熱っぽく語っていました。その根底にあつたのは人に対する愛であつたと思えます。

開院して間もなく、私たち夫婦を招いてくれ自ら院

内を案内してくれましたが、その喜びに満ちた顔、またすれ違ふ医局の人たちとこやかに笑顔を交わしていた様子などがつい昨日の事の様に目に浮かんできます。

宇宿允人という音楽家があります。ご存知の方も多いかと思えます。今年77歳になるいわば老音楽家ですが、若い演奏家に音楽の心を教えるのが自分の使命との強い信念を持っている人で、フロイデフィルハーモニーというオーケストラを率いて長年演奏活動が続けています。自らは出演料を受け取らないばかりか私財を投げ打つての奮闘が続けている様子が黒川君が共鳴して熱心に応援を続けてきました。分野を異にする宇宿氏ですが、その真摯な生き方にあい通ずるものがあつたのでしよう。彼の熱心な呼びかけで多くの人たちが懸命にサポート活動を続け、すでに180回以上の公演を果たしています。

ほぼ10年前のことになりますが、黒川君から「東京に千里山会という千里第二小学校の同窓会が出来ている。今回この会に呼ばれて参加したが、すばらしい会

だ。お前も是非入れ。」と久しぶりにガキ大将的な有無を言わさぬ命令口調の電話がありました。幼い頃に育つた千里山とそこでの人との繋がりを珠玉のごとく慈しんでいる彼でした。2002年に会員から推されて代表世話人に就任したのですが、直後に遭遇した交通事故でその後は闘病生活が続いたのはご存知の通りです。車椅子に乗つてもう一度総会に出席したいとの希望はどうとう叶うことはありませんでした。

奥様と二人三脚での壮絶な闘病の様子については2008年度の会誌に書かせて頂きました。

不幸な事故に遭遇し絶望的な歳月が続きましたが、ついにはこれ乗り越え、「患者の立場から医療を見直して医学会に提言をする良い機会を与えられたのだ」と驚くべき強靱な精神力を甦えらせたのでした。自分での執筆や発言は出来ない体でしたが、例のブザーによる奥様とのコミュニケーション手段を使い、病床から「医は愛」であるとの持論を強いメッセージとして繰り返し繰り返し発信し続けました。そして、それが彼からの日本の医学界への遺言となりました。

あまりにも惜しい人物を失つたとの無念な気持ち

がつるばかりです。

しかしながら、所詮人間の命は有限です。如何に世の中に大切な人材でもいつかは世を去らねばなりません。大切なのは、偉大な人物の掲げた理想を後世の人たちが大切に守り、さらに育てて行くことでありましよう。

いつの日か、「平田、よう来た。今日からまた一緒に仲良くやろう。」と彼が笑顔で迎えてくれる時の事を想像しています。

(完)

黒川 高秀様 遺影



御略歴

昭和十三年三月五日 誕生

昭和二十五年三月 千里第二小学校卒業

昭和三十八年三月 東京大学医学部医学科卒業

昭和四十三年三月 東京大学大学院医学研究科

博士課程終了 医学博士

昭和四十四年一月 都立駒込病院整形外科勤務

昭和四十五年八月 東京大学医学部付属病院整

形外科助手―科長

昭和五十九年四月 東京大学教授 医学部整形

外科講座

平成三年四月 東京大学医学部付属病院長

平成五年四月 東京大学医学部部長

平成十年四月 日本医科大学整形外科客員教授

平成十一年十一月 昭和大学横浜北部病院長

平成十二年二月 昭和大学医学部教授

平成二十一年十二月十二日 逝去(享年七十一歳)

役職

日本整形外科学会理事 平成九―十二年

日本整形外科学会名誉会員 平成十五年

(黒沢 尚氏提供)